

# ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり

— 一人一人の「わかる」に着目して —

山本千明\*, 皆川直凡\*\*

(キーワード: ユニバーサルデザイン, インクルーシブ教育, 情報処理モデル)

## 1 研究の背景と目的

特別支援教育の本格実施(2007年)や障害者基本法改正(2011年)の動きを受け、文部科学省(2012)は、共生社会の形成に向け、障害のある子どもと障害のない子どもができるだけ同じ場で共に学ぶことを目指し、一人一人の教育的ニーズに応じた多様で柔軟な援助や指導の充実を求めている。分離された特別な教育をやめ、障害のあるすべての子どものインクルーシブ教育を受ける権利を保障することは、障害者権利条約の批准(2014年)後初めての国連権利委員会による総括所見改善勧告(2022年)においても強く要請されている。

一方通常の学級において、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が2012年では推定値6.5%、2022年では推定値8.8%にのぼることが明らかとなった(文部科学省, 2012, 2022)。この調査では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒以外にも、困難があり教育的支援を必要としている児童生徒がいる可能性も指摘されている。国立特別支援教育総合研究所(2010)によると、発達障害のある児童生徒のつまずきやすい点と、各教科における取組の難しい児童生徒に見られるつまずきには共通点が多いことが明らかとなっている。すなわち、発達障害のある児童生徒への支援の工夫は、学級内の同じようなつまずきのある他の児童生徒にとっても必要なものと考えられる。

こうした個に応じた支援の対象の拡大に伴い、教育の領域にも、ユニバーサルデザインの考えが浸透し始めているが、田上・猪狩(2017)は、日本におけるユニバーサル教育は、How to 的な指導技術・技法というニュアンスが強く、授業論としての検証が課題の1つである、としている。吉岡・堀田(2021)は、教育におけるユニバーサルデザインアプローチモデルを整理した上で、第3のアプローチを提示し、ユニバーサルデザインを意識した授業を動的で可変的なものとして捉え直している。

教員による優良な実践事例の集約と分析は、誰もが学びやすい授業のデザインの追求に向けた必要事項の1つである(柘植, 2014)。児童が意欲をもち、「わかる」喜びを高めるユニバーサルデザインの視点を生かした授業デザインとはどのようなものだろうか。

本実践研究では、学び方の多様性に対応するための学習活動の在り方を、日本における教育ユニバーサルデザインから検討するとともに、児童一人一人の「わかる」に着目し、形式的な指導技術・技法にとどまらないユニバーサルデザインの視点からの授業デザインを実践的に追求し、その有効性を考察することを目的とする。授業実践においては、個人の物の見方や考え方を形成し、知的活動や論理的思考力等の基盤となる国語力育成の重要性を鑑み、国語科を取り上げることとする。

## 2 研究の方法

以下の手順で課題を探究する。

第1に、教育におけるユニバーサルデザインの代表的なアプローチを概観し、本実践研究の「授業におけるユニバーサルデザインの視点」の方向性を示す。

第2に、「わかる」について、認知心理学の知見を参考に検討し、ユニバーサルデザインの考え方と「わかる」授業との関連について整理する。

第3に、国語科における「児童一人一人のわかる」に着目したユニバーサルデザインの視点からの授業デザインによる実践事例を分析し、その有効性を検討する。

最後に、本実践研究の成果と課題について述べる。

## 3 教育におけるユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインは、建築家ロナルド・メイスが提唱した概念であり、7つの原則を持つ(North Carolina State University, 1997)。

この概念を授業に取り入れた日本の教育における代表

\*新居浜市立泉川小学校

\*\*鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教職系)

的なユニバーサルデザインとして、2つのアプローチが挙げられる。1つは、「学びのユニバーサルデザイン」に代表されるアプローチであり、もう1つは「授業のUD」に代表されるアプローチである（京都府総合教育センター、2013）。

### 3. 1 学びのユニバーサルデザイン

学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning）（以下、UDL）は、米国のNPOであるCAST（the Center for Applied Special Technology）により提唱された（川俣、2014）。UDLは全ての学習者を学びのエキスパートにする際の根本的な障壁を指摘し調整するアプローチである。UDLでは、学習の障害は学習者の中にあるのではなく、カリキュラムにあると考える。このカリキュラムとは、教育の目標、方法、教材教具、評価を含めた広義の意味で捉えられており、それぞれについて、一つのものや全ての人に一つのを合わせるような解決方法ではなく、個々のニーズに合わせて選択や調整が可能である柔軟なアプローチを目指している。

UDLは脳科学のエビデンスに基づき、認知ネットワーク、方略ネットワーク、感情ネットワークの3つの主な脳ネットワークの作用について説明し、それに対応した「提示に関する多様な方法の提供」、「行動と表出に関する多様な方法の提供」、「取り組みに関する多様な方法の提供」の3つの方略から成る「学びのユニバーサルデザインガイドライン（Ver2.0）」を示している（川俣、2014）。

### 3. 2 授業のユニバーサルデザイン

日本授業UD学会が提唱する「授業のユニバーサルデザイン」（以下、授業のUD）は、特別な支援が必要な子に対する指導の工夫や配慮は、「全員の子どもが楽しく『わかる・できる』授業のユニバーサルデザイン」になると考え、多くの児童にわかりやすい授業をつくることを目指している。授業のUD化を達成するための視点として、授業のユニバーサル化モデル（授業のユニバーサルデザイン研究会ほか、2014）が提唱されている。このモデルでは、授業の学びを「参加」「理解」「習得」「活用」の4つの階層モデルに分類し、階層ごとに「授業でのバリアを生じさせる発達障害のある子の特徴」と「授業でのバリアを除く工夫」の具体を示している。これらの理論を背景に、授業のUDでは教科ごとの研究が深まりを見せている。国語科授業のユニバーサルデザインを実現するために、桂（2011）は、指導の工夫として、「論理」を授業の目標とし、「焦点化（シンプルに）」「視覚化（ビジュアルに）」「共有化（シェア）」の3つの要件から、授業をデザインし、構造化することを提唱している。こうしたモデル化に加え、授業のUDでは、授業の指導内容を焦点化し指導方法を高める「指導の工夫」、

授業内で個別の支援を行う「個別の配慮」、授業外で補充指導を行う「個に特化した指導」の三段構えの実践がインクルーシブ教育に合致すると考えているとしている。

### 3. 3 2つのアプローチからの示唆

これまで見てきた教育におけるユニバーサルデザインの2つのアプローチには、下記の共通点が見られる。

- ・これまでの授業の暗黙の枠組みを見直す必要がある。
- ・特別支援教育の考え方を生かした指導の工夫を図る。
- ・授業を児童の側から捉え、児童一人一人の学び方の違いに着目する。
- ・児童の学びにくさ（つまずき）に着目し、つまずきが起こった後ではなく、つまずきが起こる前にそれを想定し、具体的な指導、支援の工夫を考える。

本実践研究ではこの共通点を基盤とし、「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」を「配慮を要する児童には『なくてはならない支援』であると同時に、学級の他の児童にとっても『あると便利な支援』の工夫により、全ての児童が『わかる』喜びを実感し、学ぶ力を高めることができる授業づくり」と定義する。そして、授業のUDが提唱する教科の専門性と特別支援教育からの視点を合わせた授業デザインを基に、4つの階層モデルの「参加」および「理解」の段階を中心に実践する。

## 4 ユニバーサルデザインの視点からの「わかる」授業

近年、学習指導に関連して重要視されている認知心理学の知見から「わかる」ということについて検討し、ユニバーサルデザインの考え方と「わかる」授業との関連について検討する。

### 4. 1 認知心理学からみる「わかる」

認知心理学では、人間を一種の情報処理システムであると見なし、一連の情報処理活動をより強力に行う総合力が学力であると考えられている。そのプロセスでは既有知識を内的リソースとして使うことから、知識は単に学んだ結果としての産物としてだけではなく、「学ぶ力」や「考える力」としても機能する（市川、2004）。内的リソースとして使うという側面については、多鹿（1999）が挙げている知識の性質と知識獲得の特徴から、次のように述べる事ができる。

- ・学習者は獲得すべき知識を既有知識と照合し、既有知識に合うように変えたり、既有知識のほうを変えたりすることによって取り込む。
- ・獲得すべき知識は、内的あるいは外的に制約を受けている
- ・知識獲得は既有知識（学習者の有する知識構造であるスキーマ）に影響を受ける

人間の情報処理モデル（図1）における処理構造では、

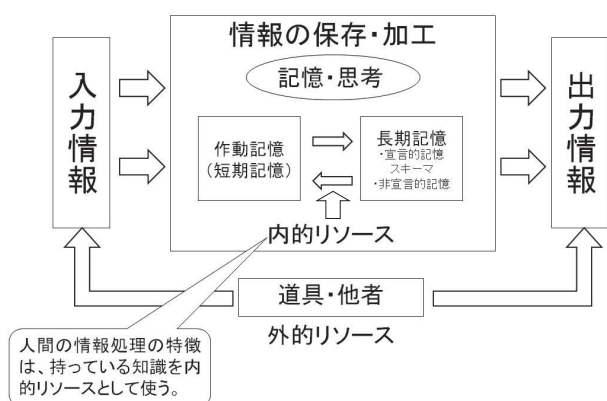


図1 人間の情報処理モデル (ブルーアー, 1997)

※内的リソースの吹き出し部分は、筆者が追記

まず、外界からの情報は、感覚器官を通して入ってくる。情報の中の一部は作動記憶（短期記憶）に入り、そこで処理される。作動記憶は、コンピュータのCPUにあたる。更に、処理された情報の一部は将来の使用に備えて長期記憶に貯蔵される。長期記憶はコンピュータのHDDにあたり、宣言的記憶と非宣言的記憶に分類される。宣言的記憶にはエピソード記憶と意味記憶という2つのシステムがある。長期記憶は、知識を連想構造で記憶し、宣言的記憶における連想構造は、スキーマとよばれる形をとる (ブルーアー, 1997)。

この情報処理モデルを基に考えると、児童の学習過程に即した「わかる」ということは、目や耳から入力された新しい情報を、作業記憶を介して長期記憶である既有知識や経験知を使って結び関連づけながら、新たな知識構造として再構成し、出力情報としてそれらを表現すること、と説明できる。そのため、児童が「わかる」と感じられる授業を行うためには、情報を入力しやすくする

ための感覚器官を活性化させる工夫、作業記憶を活性化させる工夫、既有知識を活用、活性化させたり、必要な予備知識を与えたりする指導の工夫が必要である。また、情報の処理には、形態的な処理、音韻的な処理、意味的な処理があり、記憶がどのくらい残るかはその処理水準の深まりに関連する (北尾・速水, 1986) ことから、重要な事柄を目立たせたり全体を構造的に捉えられたりするための手立てなどを積み重ね、より深い情報の処理を促していくことも必要であると考えられる。

#### 4.2 ユニバーサルデザインの視点からの「わかる」授業

「わかる」授業とユニバーサルデザインの考え方との関連を検討し、授業デザインに活用するため、この情報処理モデルとCASTによるUDLガイドライン (CAST, 2011) とを照らし合わせ、具体的な授業場面を想定して指導の工夫や支援の例を分析し、表1に整理した。

この表1から、特に情報の入力や出力では、学習者に合わせた多様な道具や機器などの外的リソースの活用や学習者の認知特性を考慮した様々な感覚器官活性化が必要であることがわかる。また、情報の保存・加工では、学習者の内的リソースである既有知識 (スキーマ) を活用できるような働きかけや新しい情報との関連づけるための手立てが数多く用意されているのがわかる。奈須 (2014) は、児童の生活体験やこれまでの学習内容を生かした教材づくりや授業展開、よりオーセンティックな授業づくりがユニバーサルデザインの視点を生かした「わかる」授業へとつながっていくと指摘している。また、情報の保存・加工では、学習者の作業記憶を考慮しつつ学習過程をモニタリングできるようにすることも必要である。

表1 人間の情報処理過程とUDLガイドライン

情報処理過程	UDLガイドライン		
	原則	ガイドライン	指導の工夫や支援の例
情報の入力	提示に関する多様な方法の提供	知覚するための多様なオプションを提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>デジタル教材で色やサイズがカスタマイズできるようにする。</li> <li>視覚、聴覚、触覚など様々な方法で情報を提供する。</li> </ul>
情報の保存・加工	提示に関する多様な方法の提供	言語、数式、記号のオプションを提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>難解な言葉を学習者が知っている平易な言葉に言い換えたり、注釈をつけたりする。</li> <li>語句や記号について、学習者の生活体験や既知の知識と結び付ける方法で事前に教える。</li> <li>文字とイラストを合わせて提示する。</li> </ul>
		理解のためのオプションを提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>先行オーガナイザーを利用して後の学習を促進する。</li> <li>重要な要素を色付けしたり大きくしたりして目立たせる。</li> <li>情報の処理の仕方や操作の過程を分かりやすく示す。視覚化する。</li> <li>チェックリストや付箋を使って、学習の転移と般化を支援する。</li> </ul>
情報の出力	行動と表出に関する多様な方法の提供	実行機能のためのオプションを提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゴールの見本や例を用意する。</li> <li>目標までのステップを分かりやすくする。</li> <li>作業記憶 (ワーキングメモリ) の容量の限界を考え、データ収集と情報の整理の仕方を支援する。</li> <li>セルフモニタリングを促す質問をする。</li> </ul>
		表出やコミュニケーションに関するオプションを提供する	<ul style="list-style-type: none"> <li>タッチパネルかキーボードになるようにカスタマイズできる。</li> <li>教材・教具を扱うときに、手や声やレバーなどいろいろな方法で付けるようにする。</li> <li>文章、スピーチ、絵やイラスト、マルチメディア、音楽など多様な媒体を制作する。</li> <li>学習者の能力と課題に合わせて電卓やCADなどの機器を活用する。</li> <li>様々な手本の例を用意する。</li> </ul>

実践授業では、ワーキングメモリの負荷をできるだけ小さくするような指導方法の工夫を図り、自らの学びを振り返る機会を学習過程に位置付ける。

ユニバーサルデザインの視点を具体化し「わかる」授業をデザインするため、ユニバーサルデザインの7つの原則に、教育における視点からの解釈を加え、次のように「教育におけるユニバーサルデザイン7原則」を作成した。(【 】はそれぞれの原則のキーワードである。)

- ・原則1 クラスの誰もが学習に参加できる。【だれでも】
- ・原則2 一人一人の学び方で学べる。【個に応じて】
- ・原則3 何をどのように学ぶかがすぐにわかる。【学び方のわかりやすさ】
- ・原則4 必要な情報がすぐ理解できる。【情報のわかりやすさ】
- ・原則5 間違えても大丈夫という安心感がある。【安心感】
- ・原則6 過重な負担がなく、無理せずに長く学べる。【学びの過程の簡単さ】
- ・原則7 利用しやすい環境や教材、学習しやすい教示や課題である。【学びやすい環境】

この「教育におけるユニバーサルデザイン7原則」の各原則の関連を考え、構造化したものが図2である。

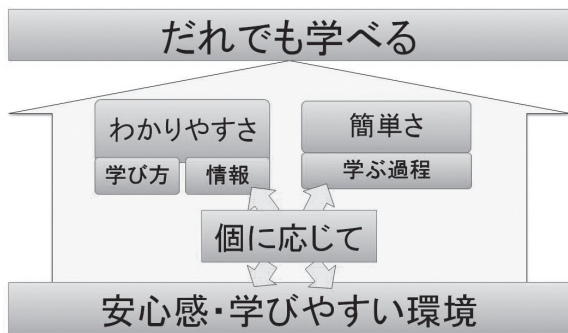


図2 授業におけるユニバーサルデザイン7原則の構造図

この図では、安心感のある学級・利用しやすく学びやすい環境という学習に参加するための原則が土台となって他の原則を支えている。学習の過程においては、わかりやすさ・簡単さといった原則が特に重要となる。わかりやすさは、学習の仕方や学び方といった「学習方法のわかりやすさ」と何を学ぶのかという「情報(学習内容)のわかりやすさ」に分けられる。これらに、一人一人の学び方に応じた柔軟な学びである「個に応じて」という原則を関連づけることで、誰もが学習できるという原則がより実現しやすくなると思われる。

この構造図と授業のUDが提唱する「授業での『学び』の階層モデル」との関連を図式化し(図3)、「参加(活動する)段階では、授業の他に、安心感・学びやすい環境づくりとして、教室の物的環境の整備や児童相互や教

師と児童間の温かな人間関係の醸成にも配慮し、そのような学級づくりを授業づくりの基盤とする。「理解(わかる)」段階では、誰もが学習に参加できるよう、「簡単」「わかりやすさ」「個に応じて」というキーワードからユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりの指導の工夫を図るが、授業で学ぶ内容を単純なものにしたり、特別支援教育の形だけを取り入れたりすることなく、教科の本質をしっかりと見据えてより質の高い授業を作っていくことが大切である。

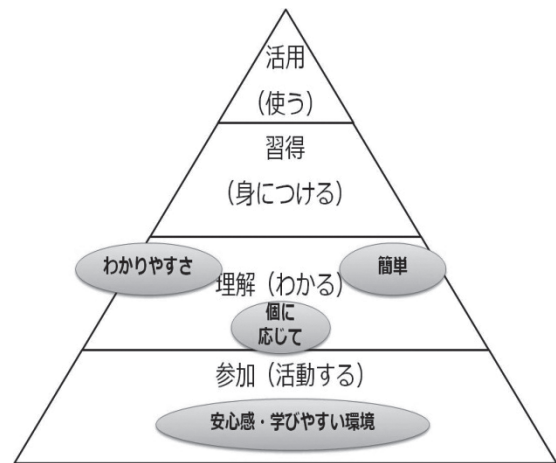


図3 「学び」の階層モデルとの関連図

※授業のユニバーサルデザイン研究会ほか(2014)の概念図をもとに、筆者が作成

## 5 授業実践

### 5.1 国語科におけるユニバーサルデザインの視点からの「わかる」授業

金久ら(2009)は、今後の国語科の授業で重要視される力の育成を「PISA型読解力」の育成、向上目標と重ねて捉えることにより、これまでの授業を見直し、視点の転換によって新たな意味をもたせ、総合的・重層的な能力を身に付けられるよう授業展開を図るための指導方法や指導内容を具体的に提言している。金久ら(2009)は実生活に生きて働く言語能力を育成するために、「課題把握」「取り出し収集」「解釈」「熟考・評価」「表現」の5段階の指導プロセスを提唱している。これらの段階をステップ的に、系統的・螺旋的な指導を行う一連の学習活動を構成することにより、児童の目的意識・相手意識・処理意識を明確にし、考える力を基盤に据えた多様な学習展開を図ることができる、としている。この指導ステップを基に、本実践研究における学習過程を「つかむ」「調べる」「深める」「まとめる」の4段階とした。

3で述べた情報処理モデルとの関連を考え、「つかむ」段階では、課題や学習内容をわかりやすく提示し、活動への見通しを持たせることが大切である。学習課題や学

習活動の流れの提示が、ユニバーサルデザインの視点を生かした指導の工夫として挙げられる。学びの入り口画面でいかに児童の心を「つかむ」か、児童と教材をつなげる資料提示の工夫や教育機器の活用を図り、児童の生活体験と既有知識に働きかけるなど、よりオーセンティックな学習になるよう、児童と教材との出会いに配慮する（「子どもとつなぐ化」）。そして、学習課題を焦点化し、一時間の授業で学ぶべき事柄をしっかりと理解させる（「課題の焦点化」）。その際、課題を単純化するのではなく、本質的な課題に迫れるよう留意しなくてはならない。

「調べる」段階では、スムーズに既有知識や経験知からの情報を取り出せるように、あるいは学習内容の理解の促進を図れるように、センテンスカードや図や絵を用いたり、学習内容全体が把握しやすいように板書の構造化を図ったりする（「内容の見える化」）。その際、教師の教えたい内容、児童が学ぶべき内容が見える化するだけでなく、児童の考えていることやわかっていることなど、思考の見える化にも考慮する。

「深める」段階では、児童の特性に応じ多様な学習手段を用意したり（「手段の多様化」）、ペアやグループ学習などを取り入れ「学びの共有化」を図ったりすることで、既有知識を生かした学びが深まるように工夫する。また、いろいろな場面で、ワーキングメモリが少ない児童への手立てとして、「指導のスムーズステップ化」を図り、記憶を補助できるように教材を工夫することも必要である。最後に、学んだことをその児童なりに書くことにより「まとめる」段階につなげる。学習過程とユニバーサルデザインの視点を生かした指導の工夫について図にまとめたものが図4である。これらを手掛かりとして、国語科における授業実践に取り組んだ。

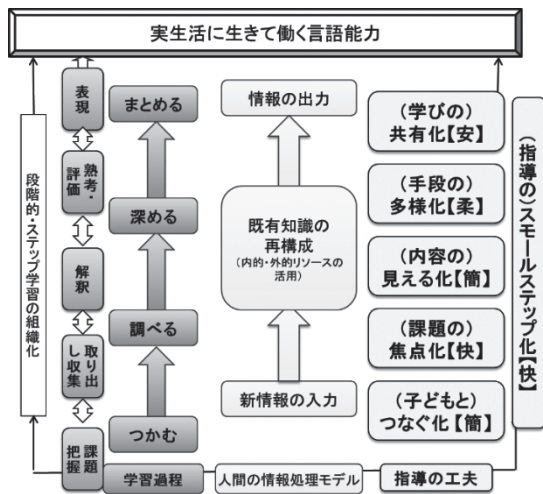


図4 学習過程とUDの視点を生かした指導の工夫  
※金久ら（2009）の概念図をもとに、筆者が作成

## 5. 2 実践授業

### 6年「町のよさを伝えるパンフレットを作ろう」

本単元は、文章全体の構成の効果を考え、表現の効果について考える力を育てることをめあてとし、「課題設定や取材→構成→記述→推敲→交流」という文章ができあがるまでの過程に沿って構成されている。

自分の伝えたいことを明確に表現するため、単元を貫く言語活動として、「来年の6年生のために、自分たちが調べた修学旅行に関するオリジナルな情報を用いて、修学旅行スペシャルパンフレットを作る」を設定した。小学校時代の一番の思い出となる行事である修学旅行を題材に取り上げ、次年度の6年生へ伝えるという、明確な目的意識と相手意識をもたせ、学習意欲の継続を図る。できあがり2種類以上用意することにより、個に応じた指導を行い、指導のスムーズステップ化では、パンフレットの全体構成を考えるという課題を、パンフレットの折り方、全体のページ数、各ページの内容を考えるといった細かい段階に分け、一つずつ取り組めるように工夫した。今、何をするのがはっきりとし、どの児童も集中して学習に取り組むことができていた。

指導計画（全11時間）とユニバーサルデザインの視点を生かした指導の工夫は次のとおりである。

#### 指導計画（6年 全11時間）

次時	学習活動	指導の工夫	評価規準・評価方法
1	5年生のために「オリジナルスペシャル修学旅行パンフレット」を作ろう		
	修学旅行について話し合い、5年生に修学旅行のとおき情報を伝えるためにスペシャルパンフレットを作ろうという学習課題をもち、学習計画を立てる。	修学旅行に行く時に、必要な情報が載っているパンフレットがあるといいことに気付かせ、相手意識、目的意識を明確にする。参考にするパンフレットを用意し、それを見て「いいなと思った点」に着目させる。グループで話し合うことで、考えを共有させ、パンフレットの特徴について理解させる。	いろいろなパンフレットに興味をもち、どのような情報が書いてあるかを読み取ろうとしている。(ア①観察)
2	相手や目的にあった材料を選び、パンフレットの構想を立て、修学旅行でのインタビュー計画を立てる。	ホワイトボードで考えの見える化を図り、共有することで、自分のパンフレット作りの参考にする。ワークシートを用いて、インタビューの具体的な内容や方法をイメージしやすくする。	相手や目的に応じたパンフレットの構想を考えている。(イ①観察)
	取材計画を立て、取材をする。	ペアやグループで学び合いの時間を持ち、アイデアや考えを発表したり、アドバイスしたりすることでお互いのよさを共有する。	パンフレットに必要な情報や材料を集めることができる。(イ①観察、ノート)
	修学旅行場所での取材。		
3	学校に帰ってきてからの情報収集。		
	集めた情報や材料を整理し、使いたいものを選ぶ。パンフレットの形を決めて、目次や割り付けを考える。	まず、パンフレットの折り方や全体のページ数の目安をつけさせる。次に、各ページに載せる内容を考えさせる。(指導のスムーズステップ化) 2つのページ案(割り付け案)モデルを提示し、見出し、リード文、写真、解説等の割り付けの工夫に気付けるようにする。ペアで話し合うことにより、効果的な割り付けについて理解を深めさせる。	パンフレットという様式の特徴を理解し、表現の効果を考え、文章全体の構成や割り付けを工夫している。(イ②ノート、割り付け案)
4	本物のパンフレットを参考に、相手によく伝わる表現や語句を工夫した文章を書く。	グループで本物のパンフレットを参考に、具体的な表現や語句の工夫を話し合う。短いサイクルで何度も見直し、推敲のポイントを明確にする。	引用したり、写真や図を用いたりして、伝えたいことが明確になるように書いている。(イ③ノート)
	下書きを推敲する。		

10	清書し、文章を仕上げる。	清書の手順を明確にし、間違いを減らせるようにする。	文や文章にはいろいろな構成があることについて理解する。(ウ①ノート)
11	パンフレットを読み合い、感想を交流する。	読み合う時の観点を示し、作品のよい点や改善点を付箋に書き、具体的に伝えさせる。 お互いのよい点を伝え合い、パンフレット作りの達成感や成就感を味わわせる。	互いの記事を読み合い、目的に応じた文章構成や表現になっているかを助言し合っている。(イ④ノート)

表2 UDの視点を生かした指導の工夫(6年)

	指導の工夫
A	学びにくさのある児童のつまずきを予想し、それを授業デザインに生かす。
B	学習課題や学習活動の流れを提示する。
C	子どもとつなぐ化(導入時、自分の生活を振り返り、教材と自分をつなぎ、学習意欲を高める。)
D	課題の焦点化(学習課題をどの児童も何を考え学ぶかわかるものにする。)
E1	内容の見える化
E2	ICT機器を活用して「見える化」する。 学習内容がわかり、理解が深まるように板書を構造化する。
F1	手段の多様化
F2	本物のパンフレットやガイドブックを活用し最終成果物(ゴール)を明確にする。 できあがりや2種類以上用意することにより、個に応じた指導を行う。
G	学びの共有化(ペア学習やモデル発言を取り入れる。)
H	教師の発問や指示をシンプルにする。
I	指導のsmallステップ化(指導過程や指導内容をできるだけ細かくする。)

実践学級の児童を対象とした本単元のアンケートを図5にまとめた。

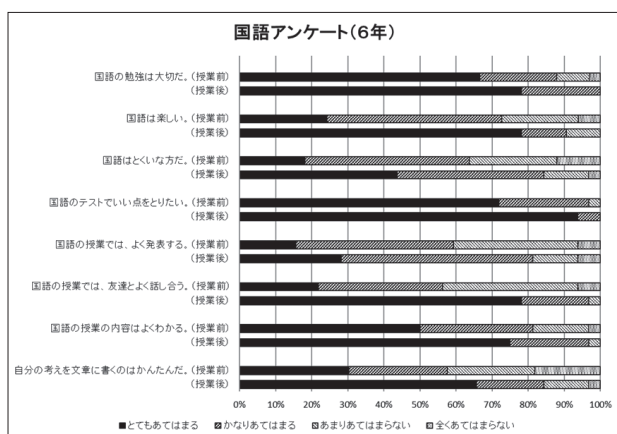


図5 6年生のアンケート結果

全ての項目で、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」と回答した児童の割合が増えており、国語に対して積極的に取り組もうとする姿勢が高まっていることがわかる。授業後「国語の勉強は大切だ」と肯定的に答えた児童の割合は100%になった。また97%の児童が「国語の授業の内容はよくわかる」と答え、特に「とてもあてはまる」と答えた児童の割合が50%以上増加した。ユニバーサルデザインの視点による授業づくりの工夫、特に本単元

で行った「指導のsmallステップ化」が内容理解を促進していると言えるだろう。「国語は楽しい」と答えた児童の割合は91%である。児童の実態に応じた授業づくりの工夫を行うことにより、児童が国語に興味をもち、楽しく学習に取り組めるようになったことがわかる。「国語はとくいな方だ」と答えている児童も85%となり、「わかる」「楽しい」と感じ、学習に取り組んだ結果、国語に対する自信が付き得意であると感じるようになったと推測できる。「国語のテストでいい点をとりたい」と答えた児童は100%となり、テストへの意欲化にもつながっていることもわかる。「国語の授業では、友達とよく話し合う」という質問項目では、94%の児童が肯定的に答えており、「とてもあてはまる」と答えた児童は、22%から78%に大きく増加している。ペア学習などの学びの共有化による効果が表れていると考えられる。また、「自分の考えを文章に書くのはかんたんだ」と回答している児童の割合は、58%から85%に増加している。本単元は、国語科の内容項目の「書くこと」にあたり、単元を貫く言語活動として「パンフレット作り」が設定されていた。授業前は「書くこと」に対して苦手意識をもっている児童が4割以上見られたが、授業改善の結果、それらの苦手意識が軽減されていることがわかる。

アンケートの自由記述では、66%の児童が「パンフレット作りが楽しかった」という趣旨の記述をしており、「国語の授業はあまり得意ではなかったけど、パンフレットを作って楽しいと思いました。パンフレットを作って、少し国語の授業がとくいな気持ちになりました。国語のテストでいい点をとりたいのでがんばりたいです。これからも国語の勉強を大切にしていきたいです。」と苦手意識を克服し、今後の学習への前向きな記述も多く見られた。

学級全体の国語への意欲化が図られたことは、「子どもとつなぐ化」、「課題の焦点化」、「内容の見える化」、「手段の多様化」、「学びの共有化」、「指導のsmallステップ化」のユニバーサルデザインの視点を生かした6つの指導の工夫が、配慮を要する児童だけでなく、全ての児童に有効であったことを示している。苦手意識が強かった「書くこと」に関しても、授業を通して苦手意識が軽減されている。本実践を通して、国語科におけるユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりは、児童が国語の学習の楽しさを感じ、友達との関わりを深め、自分ではできるという有能感を高めることができ、「わかる」喜びや学ぶ力を高められる授業につながると言える。

## 6 本研究の成果と課題

### 6.1 実践研究の成果

本実践研究の成果は以下の2点である。

第1は、「わかる」ということに着目し、認知心理学の知見における人間の情報処理過程とユニバーサルデザインの視点を関連づけた6つの指導の工夫、すなわち「子どもとつなぐ化」、「課題の焦点化」、「内容の見える化」、「手段の多様化」、「学びの共有化」、「指導のスムーズステップ化」は、配慮を要する児童だけでなく、全ての児童の「わかる」に有効であった。特に「子どもとつなぐ化」は、吉岡・堀田（2021）が指摘した第3アプローチの「子供一人一人の生活経験との接点を考える」から有効であった。情報処理モデルと学習過程の関連を捉え、この6つの指導の工夫を生かし、単元構成や一時間の授業デザインを行うことは、興味や意欲を喚起し、「わかる」喜びのある授業の創造へとつながった。

第2に、児童のつまづきを予想し、一人一人の学び方や得意を生かす指導の工夫により、個々のニーズや特性に合った指導や支援の工夫を行うことができた。このように通常の学級においてユニバーサルデザインの視点を生かすには、授業を教師の教えやすさから児童の学びやすさへと捉え直すことが必要であることが確認できた。全ての児童に対応する「ユニバーサルデザイン」という1つの手法があるのではなく、多様な学習者を前提にした「一人一人の学び」を育む学習を児童の側から見直しデザインしていく過程こそが、「授業におけるユニバーサルデザイン」であると考えている。

## 6. 2 実践研究の課題

通常の学級における児童全員の認知特性や学力に合わせた具体的方策をとることは大変困難であった。しかし、一人一人の違いに対応した指導の充実を図っていくことは、インクルーシブ教育における合理的配慮の観点からも今後さらに必要となる。教師による授業デザインという方略の他に、児童自らが自分の学びを自覚し、自分の得意を生かした学び方の創造を行う必要がある。今後はその一人一人の学び方を生かす授業デザインの具現化を図ることが課題である。

また、6つの指導の工夫による授業デザインの実践を通して、国語への学習意欲の高まりや内容理解の促進が図られたが、国語科の他領域の学習や他教科への有効性については、本研究のみで判断することは難しい。今後、その効果の検証が必要である。

## 文献

- ブルーアー, J. T. (1997), 松田文子・森敏昭 (監訳) 『授業が変わる 認知心理学と教育実践が手を結ぶとき』, 北大路書房, pp.21-25
- CAST (2003), Universal Design for Learning Guidelines version2.0 Wakefield, MA ; Author 金子春恵・バーンズ亀山静子 (訳) 学びのユニバーサルデザインガイドライン ver2.0, <https://udlguidelines.cast.org/binaries/content/assets/udlguidelines/udlg-v2-0/udlg-fulltext-v2-0-japanese.pdf> (アクセス確認 2023. 1. 10)
- 市川伸一 (2004), 『学ぶ意欲とスキルを育てる』, 小学館, pp.19-28
- 授業のユニバーサルデザイン研究会・桂聖・石川謙二・廣瀬由美子 (2014), 『授業のユニバーサルデザイン vol7』, 東洋館出版社, 91p
- 金久慎一 (編)・瀬川榮志 (監修) (2009), 『「PISA 型読解力」が向上する国語科授業の改革 高学年』, 明治図書出版, 140p.
- 桂聖 (2011), 『国語科授業のユニバーサルデザイン 全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』, 東洋館出版, pp.20-120
- 川俣智路 (2014), 「国内外の「ユニバーサルデザイン教育」の実践」, 『ユニバーサルデザインの視点を活かした指導と学級づくり』 (柘植雅義編著), 金子書房, pp.8-19
- 北尾倫彦・速水敏彦 (1986), 『わかる授業の心理学』, 有斐閣選書, pp.11-18
- 京都府総合教育センター (2013), 平成 23・24 年度特別支援教育部研究プロジェクト 通常の学級におけるユニバーサルデザイン授業の研究, [http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/gakko/pdf/doc\\_univ\\_syousaiban.pdf](http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/gakko/pdf/doc_univ_syousaiban.pdf) (アクセス確認 2023. 1. 4)
- 国立特別支援教育総合研究所 (2010), 「小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究：平成 20 年度 - 21 年度」, pp.237
- 国連人権高等弁務官事務所人権委員会 (2023), Concluding observations on the initial report of Japan <https://www.ohchr.org/en/treaty-bodies/ccpr> (アクセス確認 2023. 1. 4)
- 文部科学省 (2023), 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm) (アクセス確認 2023. 1. 4)
- 文部科学省 (2022), 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 (令和 4 年) について, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/2022/1421569\\_00005.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2022/1421569_00005.htm) (アクセス確認 2023. 1. 4)
- 文部科学省 (2012), 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 (平成 24 年度), [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/)

- material/1328729.htm (アクセス確認 2023. 1. 4)
- 奈須正裕・桂聖 (2014) 対談, 「コンピテンシー・ベースの教育と授業のユニバーサルデザイン」第6回授業のユニバーサルデザイン研究全国大会
- NC STATE UNIVERSITY (1997), Center for Universal Design  
<https://design.ncsu.edu/research/center-for-universal-design/> (アクセス確認 2023. 1. 4)
- 多鹿秀継 (1999), 『認知心理学からみた授業過程の理解』, 北大路書房, pp.36-40
- 田上美由紀・猪狩恵美子 (2017), 日本におけるユニバーサルデザイン教育をめぐる研究動向—インクルーシブ教育の実現を目指した通常学級改革の視点から—, 福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学, 第3号, pp.19-26
- 柘植雅義 (2014), 「誰もが学びやすい授業のデザインとは?—ユニバーサルデザインという考え方と手法」, 柘植雅義 (編著) 『ユニバーサルデザインの視点を活かした指導と学級づくり』, 金子書房, pp.2-7
- 吉岡尚孝・堀田千絵 (2021), 教育におけるユニバーサルデザインアプローチの動向(2)—インクルーシブな視点における国語科教育実践からの考察—, 人間環境学研究, 第19巻2号, pp.83-90